

## Ⅱ 老人クラブへのメッセージ

### 暮らし支えあい活動で、老人クラブが、 みんなが、元気に

大阪市立大学 非常勤講師  
竹村 安子

暮らし支えあい活動は、やもすると、子どもなどの家族がすべきことだとか、個人生活に入り込み過ぎる等の理由から、活動を躊躇している老人クラブが多いのではないかと思います。しかし、確実に今と同じような「暮らし」を続けていけなくなるのではないかという不安を多くの高齢者がかかえているという実態が本報告書でも明らかになってきたように思います。

#### ■報告書から

##### 1. 手伝ってもらいたいことがある人は、近い将来 75%に

ほとんどの人は親族等に連絡できますが、「孤独になること」に不安を感じている人も 17%おられます。また、手伝ってもらいたいことがある人は、現在 55%ですが、近い将来は 75%に増加し、その内容は「庭木の手入れ」や「声かけ(安否確認)」など、時々必要になる項目に加え、「買い物の付添」「食事の支度」など、日々の暮らしを維持するために必要な項目も多くなっています。そして、手伝ってもらいたいことが「ない」と答えられた方は 45%おられ、その中の 2割の方が「他人に迷惑をかけたくない」と答えられ、その多くは健康状態がよくない人や近所づきあいが少ない人たちです。

##### 2. 暮らし支えあい活動への理解と働きかけを

モニターの中の 82%の人が、現在手伝えることがあると答われていますが、10年後には 45%となります。これは、10年後には今より 10歳高齢になるわけ

ですから、当然の答えだと思えます。

暮らし支えあいを次の活動者に継承していくことが求められているのです。会員の方々の理解と活動が求められているだけでなく、会員の皆さんの発掘や働きかけが必要だと思えます。

### 3. 「不安」に思うときがある人は92%、その内容は健康状態や日常生活の維持が上位に

「不安」に思うときがある人は92%おられます。その主な内容は「病気になること」(79%)、「介護が必要になること」(55%)、「身の回りのことができなくなること」(50%)、「家事ができなくなること」(40%)、「災害時の対応」(36%)などで、健康状態や日常生活の維持に関する項目が上位に挙げられています。今回のモニターが「ひとり暮らし」と「高齢者夫婦世帯」であるため、今は元気でも、いつか困るときがくるのではないかという「不安」をもっておられるのが、本報告書の中に如実に表れていると思えます。

これから社会は超高齢社会に、そして、ひとり暮らしや高齢者だけで暮らす高齢者世帯は確実に増えていっています。それに伴い「不安」を抱える人も増えていくでしょう。

住み慣れた地域で、町で、暮らしを支えあう取り組みが求められていくと思えます。本報告書を参考に、それぞれのクラブで話し合っ、ささやかであっても、今できることを、一歩始めていけば…、そのことから会員同士のつながりもより豊かになってくるのではないかと思えます。

そして、活動が老人クラブだけでなく地域のいろいろな団体や活動する人たちと協働して行われるようになると、本当に住んでいる地域が、町が、住みやすいところになっていくと思えます。

「暮らし支えあい」活動で老人クラブが、地域が、町が、元気になっていくことを願っています。

